

○スタンレーパーク・クイーンエリザベスパーク



○ブリティッシュコロンビア大学 (UBC)





○グランビルアイランド



○ピースアーチ



○セントジョージズスクール



I. 1日目 スタンレーパーク 文責：生徒 A

初日のこの日はバンクーバー空港にてコーディネーターと落ち合い、そのままバンクーバー市内へ向かい、市内観光を兼ねた先住民学習を行った。

一步空港の外へ出ると、緑に囲まれたバンクーバーの街が目に入った。コーディネーターのリックに話を伺うと、バンクーバーは2020年までに「世界で最もグリーンな都市」を目指しているということで、建築物の緑化や街中にあるポストなどの設置物も景観を損ねないために葉の柄にするなどのプロジェクトにも取り組んでいるそうだ。



最初に訪れたダウンタウンの南に位置するクイーンエリザベスパークは、カナダで最初の市立植物園である。公園名になっている「クイーンエリザベス」は、1939年に当時のイギリス王妃、エリザベス一世がこの公園を訪れたことを記念して名付けられた。ガラス張りのドームが特徴的で、元々は採石場であったが、現在では緑と綺麗な花々に囲まれた庭園となっている。

この日のメインであったスタンレーパークは、ダウンタウンの西に位置し、北アメリカの都市公園ではトップ10に入る大きな公園である。公園に入ってすぐ目に入るのが、巨大なトーテムポールだ。トーテムポールとは北アメリカの西海岸に住む先住民が作る柱状の木の彫刻で、部族のリーダーのお墓であったり、祝い事があった時に作られたものである。これらは物語などを表しており、動物などの彫刻が施されている。それぞれのトーテムポールには意味があり、手を広げているものはその土地に入ってくる人間を歓迎、そうでないものはこの土地に入るな、という意味を含んでいる。また、トーテムポールの完成を祝って、「ポートルッチ」と呼ばれる集会が開かれ、そのトーテムポールが作られた目的である通過儀礼を数週間にわたって祝う。現在も、ポートルッチは行われるが、週末のみの開催に限定されている。

その他にもスタンレーパーク内には、先住民ファーストネーションズの文化を紹介する展示が多く見受けられた。その中でも私が特に興味を持ったのはファーストネーションズの文字の紹介だ。バンクーバー周辺には数多くのファーストネーションズが生活しており、それぞれの部族は全く異なる言語形態を持っている。北海道の先住民族アイヌは、北海道の各地域に居住しているが、方言はあるものの基本的な言語は同じなので、とても驚いた。ファーストネーションズはアイヌ同様文字を持たないため、現在ではアルファベットを使用している。隣接した地域に住みながら全く違う言語を使用している点に、カナダ国内に内在する先住民族の文化の多様性を感じることができた。

スタンレーパークの一部に「デッドマンアイランド」という別名を持つ場所がある。その理由は、昔ヨーロッパ人が植民支配していた時に木々に死体がぶら下げられているのを見たからであり、これはファーストネーションズの葬式の際の儀式だったと考えられている。

Ⅱ. 2日目 ブリティッシュコロンビア大学 文責：生徒 B・生徒 C

ブリティッシュコロンビア大学(以下 UBC)は、バンクーバー州西部に位置する州立大学である。訪れた私たちを圧倒したのは、400ヘクタールを超える広大な敷地だった。キャンパスを入るとまず目に入るのは、連立するアパートやマンションだ。大学が経営するこれらの集合住宅には、UBCの学生ばかりではなく一般市民も入居している。大学は広大な敷地面積を持って余すことなく不動産として活用し、その利潤で学費を抑えているという。大きな



キャンパス内にはそこかしこにバス停があり、私たちもバスに乗って移動した。目に入る学生の人種は多種多様だが、私には特に中国系の学生が多いように思われた。UBCには世界中からたくさんの留学生が集まる。バンクーバー市街よりもさらに多様な人種の、45000人以上の学生が行き交うキャンパスはまるでひとつの街、世界の縮図のようにも見えた。

キャンパス内で目に付いたのが、並木の間に設けられていた小さなハンモックと青い柱である。大学が学生に勉強の合間にリラックスできる環境を与えるため設置したハンモックには、それぞれ思い思いに腰掛けて読書をしている学生の姿があった。青い柱には緊急呼び出しボタンが付いていて、夜間の緊急事態にそれを押すことで、即刻対応が受けられるということであった。さらにUBCは今年で設立100周年ということで、街灯などに100年を記念するフラッグが飾られていた。また、特に興味深かったのは「ボイスチェンジャー」である。これは一見ただの丸い鉄の台であるが、この真ん中に立って声を発すると、自分の体の中だけで音が反響する。周囲の人は違いを何も感じないため、自ら体験しなければわからない不思議な感覚であった。

到着してまず向かったのは人類学博物館。ここには、カナダの先住民族達の総称であるファーストネーションズの伝統的な木工作品や、世界中の様々な民族の伝統工芸品が展示されている。入場すると、すぐさま7~8mはあろうかというトーテムポールが展示されている。それぞれのトーテムポールには言い伝えられる物語の説明書きが添えられ、また部族ごとの特色もよく見て取れる展示となっていた。現在UBCのキャンパスになっている敷地は、以前ファーストネーションズのマスキアム族が住んでいた場所ということで、野外にもいくつかのトーテムポールが設置されていた。

この博物館で最も有名な展示品の一つ、ファーストネーションズ出身のアーティスト、ビル・リードによる“**The Raven and the First Men**” (ハイダ族の創世神話に基づく、人類誕生の瞬間を表した木工彫刻)は、民族の伝統というものについて深く考えさせられる作品であった。彼は1920年に生まれ、ファーストネーションズの一部族、ハイダ族の血を引きながらも白人として育



てられた。しかし成人してから自らのルーツに触れてショックを受け、廃れかけていたハイダ族の伝統を引き継ぐアーティストとして作品製作を始めた。彼の業績は伝統の復興だけではない。現代に生きるハイダ族の一人として、より質の高い作品を作ることを努め続けた。

「ハイクオリティな作品は必ず人を惹きつける」と説く彼の精神と、それを象徴するようなハイクオリティな作品である“The Raven and the First Men”には、伝統的であることだけが絶対的な価値になるわけではなく、磨かれない伝統は廃れていくのだと気付かされた。

次に訪れたのは、新渡戸記念庭園だ。残念ながら中に入ることはできなかったが、この遠い地に北海道にも縁ある新渡戸稲造の名を冠した日本庭園があることを知り驚いた。これは1933年にブリティッシュコロンビア州の州都ビクトリアで急死した新渡戸の死を悼み、その功績を讃えるため大学が造園したものだという。100年以上前に、今の私達の国際交流の始まりを切り開いた新渡戸稲造。その「私は太平洋の架け橋になりたい」という言葉を、今の日本が做すべき多文化社会の極まるバンクーバーの地で噛みしめることで、今回の研修の意義の重さを改めて感じた。

私達は、UBCと長年提携を結んでいる立命寮「立命館 UBC ハウス」も訪れた。偶然扉を開けてくれたのは、西アジア系の学生で、日本人が出てくるものとばかり思っていた私達は不意をつかれた。話によれば、ここは日本からの立命館学生だけでなく、世界中の学生がともに生活しているとのことであった。玄関には多言語でカラフルな掲示がされ、奥まで入ることはできなかったものの、十分にマルチカルチャリズムを感じ取ることができた。

キャンパス内を歩き回らる中で、私達はさまざまな学生に、バンクーバーの出身者として、また移住者として、この街をどう思っているかについて質問した。「自然が豊かで、人々が親切」「世界中にルーツを持つ人々との交流が可能な UBC の環境が素晴らしい」などの肯定的な意見のほか、政府に対して不満を持っている様子も見受けられた。政府や国に対し意見を持ち、政治参加の意欲を持つ姿勢は、日本の学生が見習わなければならない点だと感じた。

Ⅲ. 2日目 グランビルアイランド 文責：生徒 D

私達は、UBCへ行ったあとに、グランビルアイランドに行った。多文化主義をテーマとして学んできた。グランビルアイランドは、観光客だけではなく地元の人達も活用しているマーケットである。ホストファミリーにグランビルアイランドに行ったよと言うと、「あそこは私達もよく行っているの、子ども用のおもちゃもたくさん売っていてとても楽しい所だよ。」とお母さんが言っていた。実際に私達はグランビルアイランドの一部しか行っていないが、たくさんの種類の野菜や果物、魚やスイーツなどがひしめいていた。その種類の多様さからもカナダの多文化主義の一面が見えた。特に私が驚いたのが、果物店に柿が売っていたことである。まさかカナダで柿が売っているとは思わなかった。多くの文化が混ざり合ったカナダだからこそ見られる光景なのだと感じた。他にも様々な点で多文化主義を感じることができた。私は他の国のマーケットに行った事はなく、予想だが、他の国のマーケットはアメリカ系、中国系、インド系、ヨーロッパ系などお店ごとが国によって固まっているのではないだろうか。しかし、今回行ったカナダのグランビルアイランドは違った。様々な店が



混在していた。中国系の食べ物の店の隣にはカナダのお土産の店、その隣にはインド系の食べ物の店などとたくさんの種類の国の店が混ざりあっていた。また、別の日にフードコートにも行ったのだが、そのフードコートでもタイ料理や日本料理など店は色々であった。食べ物の点からだけみたとしても、多文化主義は明白に感じられた。

また、多文化主義についていくつか質問され、話し合った。一番答えに悩んだのは、「あなたは国境を重要だと思うか」という質問であった。国境は必要なのか、私は考えたこともなかった。国境がなければ今日本で問題となっている領土問題なども起きないし、移民なども特別許可が必要なく安全な場所に避難できる。また人だけではなく、物の流通も活発になるだろう。しかし現在の国の固有の文化や考え方が薄まってしまうというデメリットもあるのではないかと私は考えた。この質問には私もまだ答えは出せていない。国境があることによって起こる問題もあれば、また逆になくなった事で新しく起こる問題もあるのではないだろうか。また、難民を多く受け入れることは日本にとって必ずしも良いことにはならないのではないかと。国境がなくなり難民がたくさん来るのはデメリットでもある、という意見もあった。

私はこの研修に参加するまで、多文化主義という言葉は知っていても、実際に深く考えることはなかった。多文化主義とは、そして国境は必要なものなのか、まだまだ答えはでないで、これからも考えていきたい。カナダでは町中に多文化主義が現れ、街を歩く人の肌の色、目の色は様々であった。海外研修で私が行ったリトアニアやポーランドは、街の中で私達は異国の人間だと感じたが、バンクーバーでは全く感じなかった。特にグランビルアイランドは、様々な地域から集まった人とモノが入り混じった、多文化主義のわかりやすい具体例の一つだったと思う。

IV. 3日目 ピースアーチ 文責：生徒 E

ピースアーチはバンクーバー市校外の、カナダとアメリカの国境に所在する門である。1814年にアメリカとイギリスの戦争が終焉したことを記念して、1921年に建てられ、門の内側には、“May These Gates Never Be Closed”という文字が書かれており、カナダとアメリカの長い外交の歴史を表している。また、この門は創立されてから一度も閉ざされたことがなく、カナダとアメリカ両国の友好の象徴となっている。

ピースアーチに隣接して、国境ゲートがあるが、そのセキュリティは極めて厳しく、私達が国境ゲートの付近に近づくと、カナダのセキュリティスタッフにパスポートの提示を要求された。また、私達の現地コーディネーターのリックは、以前、アメリカ本土へ仕事で訪れた際、サンドイッチを買ってカナダへ帰ろうとしたところ、サンドイッチの中身まで見られるほど厳しいセキュリティチェックを受けたという。不法入国者や犯罪者の不法入国、密輸などを防ぐため、厳しいセキュリティチェックが設けられているのだ。

ピースアーチからバンクーバー市内に戻る車中、リックは私達に王立カナダ国家憲兵



(Royal Canadian Mounted Police) について話してくれた。彼らは通称「マウンティーマウンティ (Mountie)」と呼ばれ、赤い制服とキャンペーンハットという特徴的な容姿から、カナダの文化の象徴となっている。しかし、現在その伝統的な制服は、多文化共生の社会において存続の危機にさらされている。マウンティーマウンティの象徴である帽子を宗教上の理由で着用できない人々は、文化の象徴としての職務を果たせないという理由から、王立カナダ国家憲兵の職業に就くべきではないという意見がある。しかし、多文化共生がカナダの文化であるという意見の人々は、いかなる文化の人であろうとカナダの国籍を所有している限り、マウンティーマウンティになることを可能にすべきだと主張している。伝統を重んじるか、多文化共生を優先して伝統を変えるべきかという問題は、多文化共生を謳うカナダに現在も重くのしかかっている。カナダ国内でも伝統と多文化共生に対する意見は大きく分かれていることがわかった。私達慶祥生は、その問題についてディベートを行ったが、結局答えは出なかった。しかし、伝統の継承をやめるということが、その文化の消滅につながるとは必ずしも合致しないと私は考える。アイヌの人々は、現在、昔のような伝統的な狩猟生活を送ってはいない。そのため、アイヌ文化はもう消えた、失われた民族だ、などと呼ばれることもあった。しかし、アイヌの文化継承に携わる人と多く関わる上で、私は、伝統というものを再考することができた。私は、昔と同じ生活を営むことだけが伝統の継承ではないと考える。伝統とは、それまでの人々の創り上げてきたものを理解しながら、新たに創造していくべきものだと考える。現在のアイヌの人々には、彼らの創り出した文化があり、それが伝統となっていくのだ。また、カナダの伝統的文化も、多文化共生が一つの文化になりつつある社会では多少の変化を求められるかもしれないが、それを受け入れ、新たなカナダの文化を作っていくべきだと考える。

私達は、ピースアーチでの研修を終えた後、バンクーバー市内の観光案内所や、お土産店などで、アメリカとカナダの国境ビジネスについてのインタビューを行った。それぞれのインタビューにより、カナダドルとアメリカドルの変動によって、観光業にも大きな影響があること、また、カナダのお土産品に特性を持たせることが困難であることがわかった。

アメリカとカナダの文化的にも、経済的にも密接な結びつきを肌で感じ、外交の難しさ、国境が持つ重要な役割を学ぶことができた。

V. 5日目セントジョージズスクール 文責：生徒 F

研修最終日に私達はカナダの私立高校セントジョージズスクールを訪れた。カナダでは学生の1割程度しか通わないほど私立の学校は珍しいものである。この学校は男子校であるため、到着直前まで私達6人は不安でいっぱいだった。私達は一人ひとり、現地の生徒とバディーを組み、一日中バディーと一緒に授業を受けた。



1時間目は地理の授業だった。(しかし、授業の内容が地学だったのは不思議だった。) 授業中はパソコンで授業が展開されており、自習課題や課題提出はパソコンでやる方式が取られていた。生徒の参加姿勢も私達の学校の授業とは違

うものだった。私達の日ごろ受ける授業では先生が授業を進め生徒が聞いている形態だが、セントジョージズでは先生が問いかけるのに対して生徒が答えていくことで授業が進んでいた。また、生徒は自分が当たるまで手を下げることがせず、教室全員が常に手を上げている状態だった。

当日は月曜日だったため、2時間目の前には全校集会があった。大会で優秀な成績を納めた人への表彰やプレゼン発表、歌の練習をするというような内容だった。参加してみても印象は日本と似たようなことをしているということだ。しかし、現地の公立の学校に通っていた方によると、歌の練習は私立の独特な内容で公立では絶対しないような内容だそうだ。

2時間目には現地のブラスバンドに混ざって楽器を演奏する機会があった。カナダの学校は日本と違って放課後に部活動として活動するのではなく、授業の一環としてそのような活動をしている。

3時間目には9年生(日本で言う中学3年生)の日本語クラスを取っている生徒を相手に北海道の観光と、アイヌ民族についてのプレゼンを行った。セントジョージズの生徒はアイヌにとっても興味を持ってくれて、同じ先住民族がいる場所に住んでいるので、お互いの先住民族についての意見交換もできた。



その後、学校近くのファーストネーションズの一部族であるマスキアムセンターで民族料理を食べ、マスキアム族についての話を聞いた。昼食はマスキアム伝統料理の鮭に揚げたパン、サラダ、ベリーなどの果物が混ざったフルーツポンチのようなものだった。その後行われたマスキアム族の話ではマスキアム族の先住民族の伝承に携わっている方に案内していただき、トーテムポールの話やマスキアム族が実際に使った船、ロングハウスや民族間で起きた争いの跡地を見学した。この際の移動はスクールバスを利用した。日本では乗れない乗り物なので乗れてよかったと思う。

4時間目はまた学校に戻ってバディーと一緒に授業を受けた。物理の授業だったが授業の方法は日本と違うものだった。日本であればグループに分かれ、一斉に全グループが実験をするが、カナダはひとグループごとに実験を順番に行う方式だった。また、授業中の待ち時間に現地の生徒達と話す機会があり、日本のことについて現地の生徒と盛り上がった。

これ以外にも、陶芸の授業を受けた人、中国語の授業を受けた人などバディーによって受けている授業は様々だった。陶芸の授業を受けた人は、日本人なのにできないことに驚かれ、また、アジア系の生徒が多く履修しているという予想とは裏腹に欧米系の履修者が多かったそうだ。中国語の授業は、履修者の半分以上がアジア系にもかかわらず、流暢に話せる人が少ないことに驚いたそうだ。カナダには同じカナダ人でも祖先が別の国の人が多いため、祖先の影響で彼らも話せるわけではないのだと感じた瞬間だったそうだ。



一日でバディーとも仲良くなり、全員がもっといたかったと思うような一日を過ごすこ

とができた。現地の学校に行くことによって、日本との文化の違いをよく知ることができる研修になった。

VI. 感想

3年A組5番 生徒B

私はこの研修で、初めてのホームステイに挑み、普段あまり触れることのないマルチカルチャリズムに関することやファーストネーションズについて学んだ。また、普段授業で学んでいるボーダーツーリズムなどの観光学について深く知ることが出来た。日本よりも発展している異国の観光業の盛んさに大きな刺激を受けた。日本が見習うべき点も多く見つけ、授業でボーダーツーリズムについて触れていく中で、実際に自分で見て聞いて学んだことを一つの意見として挙げていく必要があると感じた。日本に留まらず、世界に目を向けて広い視野で物事を考えることができ、今後活かしていく上でとても大切なことを学べた。私は普段から英語に触れて生活することがないため、すべての説明が英語であることや、英語で話すという環境がとても新鮮だった。その面で、英語で見知らぬ人にインタビューすることも初めての体験だったため、同時に英語力の向上も出来た。また、初めてのホームステイはとても良い経験となった。文化や生活リズムが異なる中での1週間だったが、初めは話せなかった英語も日が経つにつれて話せるようになるのと同時に聞き取れるようになっていくことを実感でき、自分の中で一つの大きな収穫となった。最終日に行ったセントジョージズスクールでは、実際に経済、音楽、物理の3教科の授業を体験させて頂いた。その中で、日本の授業風景とカナダの授業風景では全く違い、日本の学生は恵まれた環境でしっかり勉学に励むことが出来ているのだということを実感した。



3年C組7番 生徒F

カナダでの研修は毎日自分の行動力が試されていて、インタビューをすることや発言することなど積極的に物事に向き合えたと思います。話を聞いて知ることと実際にやってみて知ることでは理解に大きな違いがありました。今回、この研修に参加することによって自分は知っていると思っていたことも実際は全然違っていたり、イメージと大きく違うものがあったので、体験することの大切さがわかりました。多文化主義を考えるとというテーマでは自分の想像よりもカナダは多文化が入り混じっていたり、国境ビジネスでは北海道に住んでいる私にとって国境、県境があることが新鮮であるため、両国が思った以上の密接な関わりがあることを知りました。現地でたくさんの発見を得た研修でした。

今回の宿泊はホームステイでした。ここでも自分の行動力が問われたと思います。初日は緊張のあまり自分から話しかけることもあまりできず、受身ばかりの会話でした。日を積むにつれてホストファミリー(特に子どもたち)との会話もできるようになり、週末にハロウイ

ンのイベントに行った際にはとても楽しむことができてよかったです。ホームステイでは日本と違う文化を持っているために通じ合わないところやコミュニケーションをとらないといけないところが多くあり、戸惑うことも多くありましたが、同じホームステイ先だった齋藤さんと協力して充実した毎日の送ることができました。

この研修を終えて、「楽しかった。」「勉強になった」というような感想で終わらずに、今後もこの研修で学んだことについて考えて、自分なりの答えをつくりたいと思います。

3年C組8番 生徒D

私は、ホームステイは初めてだったので最初はとても緊張していました。自分の英語力で話ができるのか、また小さい子たちとどう接すれば良いのかわからなかったです。ですがすぐに緊張はほぐれました。子どもたち二人と一緒に遊んだり、お母さんお父さんと一緒に書道をしたりして、とても楽しかったです。中でも楽しかったのが、日曜日に家族全員で行ったパンプキンパッチです。オレンジ色のかぼちゃが畑一面に広がっていて、とても綺麗でした。他にもパンプキンパッチでは動物と触れ合えたり、とうもろこし畑の迷路があったりして、とても楽しかったです。子どもたちともさらに仲良くなれました。日本では中々見られないような光景が見られました。日本でもパンプキンパッチを行ってほしいです。他にもホストファミリーとは色々な事をしました。白玉を作って食べたり、お好み焼きを作ったり、書道やけん玉をして遊んだりしました。子どもたちにはどれも不評で大変でしたが、お父さんやお母さんは残さず食べてくれてとても嬉しかったです。最終日には、家の近くにある森へ行って子どもたちと遊びさらに仲良くなれました。始めは子どもたちが何を言っているのかまったくわからなくて、私の言っていることが通じているのかもわからなかったのですが、段々話せるようになってきて、自分自身成長したなども感じましたし、子どもたちとの絆も深まったなと思います。とても良い経験になりました。またホストファミリーに会いたいです。

3年C組10番 生徒C

今回の研修は私にとって、初めてのカナダ、初めてのホームステイであり、渡航前から期待と同じだけ不安がありました。ホストファミリーとの対面の直前は特に緊張しましたが、私たちを迎えるホストマザーの温かい笑顔に一気に心が解れました。ホストファザーと多文化社会についての会話をし、日本から持ち込んだ折り紙や駄菓子と共に二人の子どもと遊び、彼らのおかげでプログラムの時間外もとても充実した時間となりました。休日には犬も連れて軽いハイキングに出かけたり、ハロウィンのカボチャを彫ったり、子どもたちと家のトランポリンを楽しんだりとまるで海外ドラマのような体験に驚いてばかりでした。私たちも日本料理を作ったりして、相互的な異文化交流を行うことが出来ました。「いつでもこのカナダの家に帰っておいで」と言ってくれた家族には、心から感謝しています。

どこに行っても人種を越えた交流が見られたことで、研修期間を通して生きたマルチカルチャリズムを常に体感しました。移民・難民問題が決して他人事ではなくなり、さらに多

くの外国人が日本に流入してくるだろう将来に向け、多文化社会の基礎を作ることは絶対に必要なことです。それと同時に、日本古来の伝統をどう守っていくのかについても、しっかりと考えなければなりません。今回このような貴重な研修の機会を頂いた私たちこそが若者の代表となり、文化の融合と伝統の保存について具体的に考え、挑戦し続けていかなければならないのだと、強く思います。

3年C組14番 生徒A

私は、今年の春から部活動の関係で北海道の先住民アイヌ民族について調べていて、授業でもアイヌの方の講演を聞く機会があり、先住民という存在にとっても興味を持ち、また普段から外国の文化について学ぶことが好きなので、多文化共生というものを学ぶいい機会だと思い、この研修への参加を希望した。

カナダは移民政策を多く行っている国ということもあって、ヨーロッパ系、アジア系、アフリカ系など様々の人種の人々を目にした。そのため、私はカナダ人といわれると人種としてのイメージはあまり浮かばなくなった。

ホストファミリーやセントジョージズの生徒にファーストネーションズについて聞くと、ファーストネーションズが多く住む西海岸では授業で彼らについて学ぶことがあるが、ファーストネーションズのいない内陸や東の方では、彼らの存在は知っているものの、彼らについて学ぶことはほとんどないのだそうだ。これを聞いて、まさに北海道のようだなと感じたと同時に、もっと学校教育がなされているものだとして期待していたので、これからアイヌとともに国内だけでなく、世界に向けて発信できていけたら多文化共生という見方も変わっていくのではないかと思った。

来年から大学生となるので、大学では多文化共生についてさらに深く学びたい。

3年C組22番 生徒E

私は、アイヌ文化教育についての論文を執筆しており、日本と海外の民族文化教育の違いを学ぶために、今回この研修に参加した。私は、先住民族の権利においても、文化振興の面においても日本より発展しているカナダでは、特別な先住民族教育を行っているものだと思っていた。しかし、幼い子どもを持つホストファミリーへのインタビューによると、そのような教育を学校機関で特別に行うという事はあまりなく、子どもたちは、親から直接聞いた話や、街中で直接目にする実際の先住民族の文化によって、自然とそれらの文化を知り、理解していくのだ。また、カナダには先住民族だけでなく、出身国や宗教が異なる多様な移民が多くいる。先住民族についての教育だけを行うのでは、子どもたちの知識や理解が逆に偏ってしまうのである。文化教育という名目で特別な教育を行わなくても、多文化共生を自然と受け入れられるスキルが身につく環境は、日本とは異なり、大変興味深いものだった。また、子どもたちと話し



ていても、彼らの偏見のなさ、誰に対しても平等な視点での意見の言い方などは、マルチカルチャリズムの大きなメリットであると考える。

しかし、日本がカナダを全般的に見習い、同じような多文化共生の社会を築き上げることは、日本における民族問題の解決策にはならないと考える。なぜなら、日本とカナダは歴史、国の成り立ち、人々の性質が大きく異なるため、日本には、日本独自の多文化共生に対する姿勢が求められると思う。日本がよりよい社会を築くために、私たちはカナダなどの国際都市の経過を見守りつつ、絶えず学び続け、考え続けていくべきだと思った。